

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	MICHAEL D. PANTE
論文題目	Conjuring a Capital City: The Spatial Evolution of Quezon City, 1939–1986 (首都市を創り出す —ケソン市の空間的発展, 1939～1986年—)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、20世紀におけるケソン市の歴史地理学の研究である。同市の空間的変容を、同時期に生じた社会政治的な文脈との関係で辿り、社会政治的な文脈もまた空間に制約されていることを明らかにする。それは、同市における社会と空間との弁証法的な発展の関係を検討するものである。ケソン市は、1939年に首都マニラの北東郊外に建設された計画都市であり、1949年にフィリピンの正式な首都と定められ、しかし1976年に首都の地位を失い、メトロマニラ (マニラ首都圏) の一部に組み込まれた。</p> <p>20世紀のケソン市の発展を十分に理解するには、マニラ郊外と田舎とのあいだに位置する、拡張し続ける境域としての同市のユニークな位置づけに注意を払わなければならない、というのが本論文の主たる主張である。そのために、本論文はケソン市を、境界域の首都であるとともに、社会空間的なダイナミズムの重要な諸側面を表す重層的な意味を有するものとして描きだす。具体的には、以下の諸点が重要である。第一に、ケソン市はマニラに隣接した郊外にあり、それが初期の歴史を規定した。第二に、ケソン市の境域性の重要さは、初期の20～30年のあいだにその範囲が劇的に変わっていったのみならず、同市の内外の利害関係者たちの幸運と失敗に大きな影響を与えた。第三に、ケソン市は、ポスト・コロニアルな国民国家の名目のみの首都市として、その保証なき不安定な地位を甘受せざるを得なかった。</p> <p>本論文が取り組む研究の問いとは、ケソン市の空間的境界が時間のなかでいかに生成発展していったかであり、これらの境界が異なる利害関係者 (ステークホルダー) らにいかなる影響を与え、また逆に与えられていったか、である。</p> <p>ケソン市の出現は、19世紀終盤から20世紀初期にかけてのマニラの成長拡大と、その結果としての隣接町村の郊外化と不可分に結びついている。ケソン大統領は、急速な都市化にともなう諸問題、わけても低所得者向けの住宅問題に対処するために、ゆるやかに結ばれ始めたマニラ郊外の区画整理の必要性を強く認識した。彼の解決法は、マニラの境界の外側に位置する郊外の土地を買い上げ、それを細分化して下層階級の世帯でも手が出る値段で宅地として売り出すことであった。このプロジェクトのために彼が選んだ地区がケソン市の中心部分となり、そこはまた国立フィリピン大学の新キャンパスともなった。ケソン市は、コモンウェルス法第502号の成立によって1939年10月12日に正式</p>			

に創設された。ケソン大統領は、それを模範労働者のコミュニティであり、学問のための静穏な場所であり、国民国家として独立した際の未来の首都として構想した。

フィリピンの独立後1948年7月17日にケソン市は、正式な首都となった。しかし、続く何十年にもわたり、境界的な地位に甘んじざるをえなかった。近代都市としての建設整備に必要な資金と政治意思をともに欠くことにより、大戦後の政府はそのマスタープランに沿ってケソン市を発展させてゆくことができなかった。さらには、公共交通の未整備と不動産の法外な値段のゆえに、低価格住宅プロジェクトは頓挫し、同市はおもに中流と上流のための住宅地として発展した。ケソン市にも確かにスラム地区はあるが、それらはマニラ都心部の貧困層を強制的に立ち退き移住させる一連の政策の結果であった。

そのためにケソン市は、合理的な秩序を体現するよりも、断片化された郊外となり、そこでは都市の裏社会と地方の騒擾が時に表面化して問題を生じ、政府も黙認した汚職と反政府の破壊活動とが都市の発展を妨げた。そうした政治的な緊張および理念と現実との深刻な乖離により、ケソン市は首都でありながらマニラの周辺の地位にとどまり続けた。フェルディナンド・マルコス大統領は、最終的に1976年6月24日、ケソン市に見切りをつけてマニラを正式な首都とすることを宣言した。しかしその10年後には、彼がその地位と名誉を奪ったケソン市が舞台となった都市市民の蜂起（ピープル・パワー革命）によって打倒されるという、歴史の皮肉を招いた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、近代国家の理念を体現する地理空間としてマニラ北東郊外にケソン市の設置建設が1939年に始まって以来、1986年（ピープル・パワーによるマルコス大統領の退陣）までの同市の跋行的な発展に関する歴史学・地理学・政治学・社会学にまたがる研究であり、その学際的な問題意識と実証的なアプローチが審査委員に高く評価された。フィリピンにおける「近代的」首都市の総合的研究として画期的貢献であり、以後の都市研究の進展と深化への触媒となるパイオニア・ワークであることを審査員全員が確認し、本論文の速やかな出版を強く希望した。

また、1) 本論文が、フィリピンとアメリカの図書館や公文書館その他で行った広範な史資料の探索、渉猟、調査にもとづき、ケソン市の成立と歴史発展に関するきわめて詳細な事実究明を行っている点、2) 首都市として構想された理念が実際の都市建設と運営の過程で、政治家、ビジネスマン、教会、住民ほか多数の利害関係者の思惑と介入によって、いかなる変容を余儀なくされ、いかなる地理空間が実際に形成されていったかを手堅く実証的に分析している点、3) その結果として現在あるような地理空間を現出させるに至った経緯をきわめて説得的に考察している点が、合わせて審査員に高く評価された。

本論文は、およそ10年をかけて準備作成され、全407頁、128,000 words におよぶ力作である。参考文献は出版物524点（図書 332冊、論文 192本）、公文書館文書11セット、個人所蔵文書7セット、新聞雑誌等18タイトルにおよぶ。それらの膨大な史資料に依拠した叙述は説得的であり、分析と考察は明晰で論理的である。各審査員により具体的に評価された諸点は、以下のとおりである。

第一は、マニラの国立図書館（Manuel Quezon Papers）や国立フィリピン大学図書館（Manuel Roxas Papers, Philippine Radical Papers）などに加えて、ミシガン大学アン・アーバー校のベントリー歴史図書館（Frank Murphy Papers, Joseph Ralston Hayden Papers）などで得られた新資料にもとづくオリジナルな知見と洞察は、フィリピンのみならず東南アジア近代都市研究にも大きな貢献とインパクトを与える点（小泉）。

第二は、史資料の渉猟と発掘収集に加えて、存命の当事者のインタビューなどにより、行政側だけでなく実際のステークホルダー（利害関係者）の証言を活用することによって、行政によるトップダウンの政策立案だけでなく、それが実施される際の紆余曲折が具体的に詳細に明らかにされている点（清水）。

第三は、ケソン市の歴史研究・叙述として初めての学術研究であり、政治や行政やビジネス界とは逆に住民とりわけ貧者の視点からの対抗的な叙述がなされ、分析に総合的な厚みを与えている点（ハウ）。またハウ教授は、自身が高等教育を受け青春を

送ったケソン市の歴史と地理に関する体験的な理解に合致し、ポスト・コロニアルの国民国家としての発展を考えるために、深い洞察と知的刺激を与えると論評した。

さらに本学位申請論文は、以下のオリジナルな知見を提供している点が審査員が一致して高く評価した。

第一に、ケソン市がマニラの郊外に位置することが、独立国家の新首都としての特徴を規定したことを明らかにした。すなわちケソン市は、国民国家の建設と近代化の推進という理念をトップダウンの都市計画で体现することを目指しながら、20世紀に入り膨張するマニラの中低所得者の人口の受け入れ地域の役割を果たさざるを得なかった。この2つのベクトルのせめぎあいケソン市の空間的拡大と歴史発展経路を規定してきたことを具体的に詳細に解明した功績は大きい。

第二に、東南アジアは、戦後の植民地からの独立を経て、近年、急速に社会・経済発展を遂げ、多くの国で都市化、とりわけ首都圏への人口集中が進んでいる。都市研究は、今後、さらに広く深く開拓すべき研究分野であり、フィリピンにおいてマニラ首都圏が1,000万人以上の人口を擁するメガロポリスとなってゆく過程を、ケソン市の事例から説得的に分析解明した本論文は、出版されればフィリピンの歴史地理学のみならず、東南アジアのメガロポリスの比較研究のための必読書となるであろう。

第三に、首都をケソン市から再びマニラに戻したマルコス大統領が、ケソン市の主要道路であるエドサ通りを占拠した非武装の市民によるピープル・パワー革命（1986）によって平和裏に打倒されるに至るまでのフィリピン現代史を、リベラル左翼の運動の歴史と都市空間の象徴的意味を参照しながら解明し論述する本論文は、カルチュラル・スタディーズや文化人類学に対しても大きな貢献となる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。